

トーマス・ネーゲルの価値論 価値の客観性について

藤野寛

1 ネーゲルは客観主義者か

ネーゲルは、論文集『生きるか死ぬかの問い』が収録論文「コウモリであるとはどのようなことか」を書名として刊行されたことにも規定されて、日本ではともすれば心の哲学の論客として言及される傾向にあるようだが、最も独創的かつ問題含みなのは、その価値論・倫理学ではないか。

「事実の客観主義」としての物理主義には与しないネーゲルが、価値の問題では、価値の客観性を擁護すると言いつ切る。ネーゲルは客観主義者、というラベリングの一般的流布に貢献していると思われる発言だ。しかし、私がネーゲルから受け取る印象は、これとは相容れない。彼は主観主義者だ、と言いたいので

はない。仮に彼を客観主義者と呼ぶとしても、その場合の客観性は、極めて特異なものに感じられる。

問題は、個人の生をコントロールするに際して、客観的な価値と主観的な価値をどう結び合わせるべきかにある。両者は、互いに干渉し合うことなくただ並びたつわけにはいかないし、どちらか一方を優先してもこの対立の解決は望めないように見える。この問題は、客観性や主観性の異なるレベルにおける異なるパースペクティブに現われる現実の特性を、いかにして一つの世界というコンセプトの中にまとめあげるかという形而上学の問題の、倫理学ヴァージョンである。实在主義的で非還元主義的な理論は、どの領域であれ、どうしてもこ

の問題に直面せずにはすまぬ。(8/12)

その際、ネーゲルは、倫理学者を激励するかのようにおちゃめな発言をしている。

客観性と真理とのつながりは、倫理学においての方が科学においてよりも緊密だ。いかに生きるべきかの真理が、それを発見するためにわれわれが備えているかもしれないどんな能力をも根っから超えているなどとは私は思わない。(189/228)

世界を客観的に認識することより、客観的な価値にたどり着くことの方が、ゴールとしては近そうだ、と言うのである。

2 主／客観的なのは見方であり態度である

そもそも、客観性とはどういう性質か。性質であるからには、それは何かのものに帰せられる。丸い、という性質は、地球というものや、卵というものに帰せられる。では、「客観的」という形容詞は、何を形容するののか。世界や他者や自分自身に向かい合う、われわれの向かい方、姿勢を形容する。就中、世界

を見る見方だ。ネーゲルは、だから、パースペクティブという言葉を多用する。

客観性とは、理解するための方法だ。本来の意味では、客観的なのは、信念であり態度だ。客観的な方法によってたどり着かれるのは、真理についても「客観的(な真理)」と呼ぶことができるのは、派生的にであるに過ぎない。例えば生や世界のある側面について、より客観的な理解を手に入れるためには、われわれは、それを見る当初の見方から一步下がって距離をとり、その見方そのもの、そしてそれが見る世界との関係をも対象とするような、新たな構想を作り出す。言い換えれば、理解しようとしている世界の内側にわれわれ自身を置き入れるのだ。こうして、以前の古い見方は、見かけ(現われ)とみなされることになる。それは、新しい見方よりもより主観的であり、これに照らして訂正されたり、確かめられたりする。この手続きは反復されえ、さらにより客観的な考えを生み出すことになる。(4/5)

しかし、主観的／客観的、という形容詞のセットを、通常われわれは様々な名詞に結びつける。客観(的)なテスト、客観的な価値、客観的な真理、客観的な人、といった具合だ。本来

しかし、この概念セットは、世界に対する観点や態度にこそ関係づけられるものであるはずだ。「自分のいる位置から」というのが主観的な向かい方であるのに対して、「外側から」というのが客観的な向かい方だ、と言い換えることも可能だろう。

従って、この形容が、自己や真理、価値や意味に関係づけられるのは、派生的な語用だということになる。自己中心的にしか世界を見ない主観的な自己に対して、外から世界とそこに含まれる自己を見ようとするのが客観的の自己である。主観的には真理であるように見える（見かけ上の）真理に対して、客観的に見ても崩れないのが客観的真理であり、主観にとってしか価値がないのではなく、誰から見ても否認されることがないのが客観的価値である、という具合だ。

その際、「自分の位置から」ということが認識に関わる場合には、「主観的」と訳され、行為に関わる場合には、「主体的」と訳される。「主体的に行為する」とは、どういうことか。人から頼まれて、あるいは、人につられて、たいして気乗りもしないままに（生半可な気持ちのままに）何かをするというのでは、それには当てはまらない。強い動機に駆られて「自分から」何かをする、そういう行為が「主体的な行為」だ。逃げ腰の行為ではなく、結果に対してもそれをきちんと引き受ける（責任を取る）行為である。

3 主観性は起点であり、そこから客観化の運動が起ころずにはすまない

主観的な見方は、すべての起点となるものだが、そこからは客観化への運動が起ころずにはすまない。主観的な見方とは、そこにはとどまりえないものことだ。

客観性への運動が起ころずにはすまないのは、主観的視点が狭く、偏っており、歪んでさえいるからだ。（現象としての世界」という言い方は、それだけではあまりにも無限定であるけれども、「私にとっての世界」がそう表現可能であることは否めない。）私は、客観的視点獲得への運動を起こす。そのようにして獲得される客観的視点とは、まずは——「私の」ではなく——「われわれの視点」であると言い換えることができる。さしあたり、「相手の身になって考える」という姿勢を思い浮かべるとよい。私だけでなく、相手から見たらどうなるのか、と考える。商売上の取り引きに際して、相手側からも当該事案の利害関係について考える。あるいは、闘いの渦中において、闘っている相手の側に身をおいて形勢判断をする。そこからさらに、第三者の視点にも立って戦局を見ることが望ましい。これができない人は、囲碁でも将棋でも強くはなれない。

その際、「われわれの視点」に立つからと言って、「私の視点」が消え去るわけではない。私は、依然として one of us であり続ける。それどころか——囲碁の例にとどまるなら——私が勝つためにこそ客観的視点を取る、というのが実情だろう。ただしその際、客観的視点をとればとるほど、「勝ちたい一心で」という風ではなくなくていい、という事情にあるのではないか。「勝ちたい」という私の願望・関心は、戦局を見る上で、少しづつ背景に退いてゆかないか。(棋士はしばしば「勝負も大切だけれども、それ以上に、良い将棋を指したい」とか「良い碁を打ちたい」といった言葉を口にする。客観性を帯び始めることで、主観性が変容の過程をたどり始めるのだ、とても言うおうか。)

「われわれにとっての視点」の「われわれ」は、その内包・外延をさらに拡大してゆくだろう。例えば、「われわれ男にとって」とか「われわれ日本人にとって」という風に視野は拡大されてゆく。そして、「われわれ人間にとって」というところまでは、すぐに行き着くだろう。ヒューマニズムだ。繰り返すが、それでも「私にとって」という視点がすっかり消え去るわけではない——それを、どんどん小さくし極小化することは不可能ではないとしても。

ニーチェによる「神の死」の指摘とは、自らを客観的パースペクティブと同一化し、人生の問題をすべてそこから処理できるかのように考えるという姿勢がもはや不可能になった、ということの意味するものに他なるまい。神とはニヒリストに他ならないのであって、人間は一人一人がその主観的パースペクティブへと投げ返されるのである。ニーチェのこの診立ては正しい。しかし、そこから主観的パースペクティブなどという「主義」が立ち上げられるものか。答えは「否」だろう。われわれは、自らの主観性を超え出ようとする運動へと、あらためて、立ち上がるしかない。「ネーゲルの客観主義」と言うのであれば、客観性への運動が回避不可能であるというこの点の指摘こそ、その実質をなすものではないか。ただし、ここから、神の視点に個々人のそれが包摂される、という仕方での客観主義に戻ることはもはやできない。その客観的視点なるものが、実は、人間にとって「ニヒリズム」に他ならないからだ。客観主義(永遠の相の下に立つ視点)はニヒリズムを帰結せずにはすまない。だからといってしかし、主観主義がその代案になるわけでもない。主観性は非真理である。

主観的パースペクティブが提供してくれるものなど、所詮、「強度」——あるいは「情熱」——ぐらいのものでしかない、と揶揄することは大いに可能だ。しかし、主観主義者は「それ

で？」と居直るだけだろう。その際、主観主義者がニヒリストに見えるのは、相も変わらず「神の視点」を準拠軸に見るからではない。神離れた人々（われわれ）にとっては、主観性とは、それこそが最強の砦、意味の源泉である。ニヒリストであるのは客観主義者の側であって、主観主義者は、自己中心的に、強く、熱く生きていけるのだ。

しかし、仮にそうだとしても、自己中心的な、独りよがりの意味や強度に居座ることができると考えるとすれば、それは誤解である。主観性とは、ネーゲルが繰り返すように、そこにじっとしていることを人に許さないポジションであり、それを超え出ようとする運動をあらためて発動させずにはすまないポジションなのだから。

4 客観的であればあるほど良い、わけではない

では、客観的であればあるほど、めでたしめでたし、という話になるのか。そうではない。それは無関心さ、どうでもよいという態度、宇宙論的ニヒリズムへの途である。ネーゲルは、「永遠の相の下に」立つことを推奨しているのではない。『どこでもないところからの眺め』という書名は、ネーゲルが斥けるポジションを表明するものだ。

ネーゲルは、主観主義者ではないが、だからといって客観主義者でもない。

私は、客観性への擁護だけでなく批判をも提示することになる。(5)(6)

ネーゲルが繰り返す確認する論点がある。主観性と客観性の関係というのは、連続的漸進的なものであって、二項対立ではないという点だ。

私はしばしば、便宜上、二つの観点、つまり主観的観点と客観的観点という言い方をするようになるが、(……)より主観的な眺めとより客観的な眺めとの間の違いは、実のところ、程度の問題である。(4)(5)(6)

両極の間に漸進的な連続性が成立している以上、どちらを選ぶかという二者択一にはならない。「あれか／これか」の関係にないのもちろん、「あれも／これも」というのも目標設定の表現としては適切でない。見出されねばならないのは、「ほどの位置」である。

ネーゲルには、弁証法的に考えるという発想はない。二元分

裂から出発しその総合を課題とする、という風には考えない。むしろ、連続的で漸進的な関係の中どこかに適当な落とし所を探るのだ。なんとも煮え切らない思考だ。その際、興味深いのは、その落とし所が問題ごとにそれぞれ異なると考えられている点である。世界の存在（と認識）の問題、自己の問題、人生の意味の問題、価値の問題とそれぞれに答えは一樣ではないようだ。

5 世界を客観的に認識し尽くすことは、 (当面)できない

世界の存在の問題では、ネーゲルは、客観的な認識の進歩を認め、ほとんど客観主義者になる。ただ、世界が客観的に認識し尽くされるにはなお億年もかかるだろう、と考えているふしがある。にもかかわらず、現時点で、それが既に果たされた状態と自らを同一化して議論する物理主義の思いがりをたしなめるのだ。

哲学やその他の学問分野では、歴史の発展の現段階において既にわれわれはどんなことであれ絶対的に理解するために必要とされる根本的な枠組を所有しているという怪異な前提に

基づいて、あまりにも多くの仮説や思想体系が作り上げられている。

私は（しかし）、われわれ自身を理解するために必要とされる方法はまだ存在していない、と確信している。(10/14-15)

それだけではない。客観性というのは、視点の移動によって得られるポジションであり、その際、世界を見ることだけが課題になるのであれば、客観化については、それが進めば進むほど望ましいと言えるかもしれないが（なにしろ、視覚の自己中心的な偏り、歪み、一面性が修正されてゆくプロセスなのだから）、しかし、この認識論的な問題に対するネーゲルの回答は否定的だ。というのも、客観化によって、世界はより正確に認識されてゆくだけではなく、そのプロセスの中で必然的に、世界の構成成分のあるものが世界から切り捨てられてしまうからだ。その意味で、客観的に見られた世界は、より正確な写像になってゆくのではなく、どこまでいっても不完全なものにとどまらざるをえない、というのがネーゲルの主張である。どれだけ客観的認識が進歩しようとも、いや、そうなればなるほど、そこからこぼれ落ちずにはすまない現実が存在する。それが「コウモリであるとはどういう感じのことか」という問題である。

客観的観点が極められたとしても、そこからではどうにも十全には理解できないものごとが、世界や生や自分自身について、残ってしまう。その観点が、われわれが起点とした地点を超えてわれわれの理解をどれほど拡張しようとも、そうなのだ。なぜなら特定の観点や特定のタイプの観点と本質的に切り離せないものがかかなりあるからだ。にもかかわらず、そうしたパースペクティヴから離れて客観的なやり方で世界を完全に説明しようと試みるとすれば、避け難く、すべてを還元してしまう誤りを犯したり、明らかに現実に存在する現象がそもそも存在することを頭から否定してしまったりすることになる。(7/10)

意識の主観性は、他のなにものにも還元されない現実の特性である。(7/11)

こうして、「現実的で反還元主義的な理論」(8/12)が探し求められることになる。

6 客観的な自己とは、分裂である

客観的に見るとは、視点を自己の外に置くことだ。すると、そこに必然的に、自己における分裂が生じる。なぜなら、自分の外に出た視点は、ただ世界だけでなく、自分をも外から眺めるから。眺める自分(ネーゲルの言う客観的な自己)と眺められる自分への分裂、主観的に見、欲する自己と、客観的に自己自身を見る自己との分裂だ。自己意識とは、分裂の別名である『死に至る病』にならって、「主観性の絶望(自己中心主義)」と「客観性の絶望(ニヒリズム)」について語ることも十分に可能だろう。

分裂、というのは、否定的ニュアンスの色濃い言葉だ。人は、ほとんど論理必然性に従うかのように——原初の(?)——統一性(アイデンティティ)への回帰を希求するのではないか。定立/反定立/総合、という言葉づかいは、この運動を描き出すそうとする試みの一例に過ぎない。

自分自身を客観的に、宇宙というスープの中に偶然発生し、ほんのつかの間存在するだけのちっぽけな有機的泡とみなすなら、それは無関心さに近い態度を生み出す。そのような観点からのトーマス・ネーゲルなる人の生に対する私の態度は、

他の生き物の生に対する態度と同じだ。だが、私自身に対する私の態度はそれとは全く異なるものであって、両者は衝突する。主観的に自らの個人的生の様々な細部にまで関与している同じ人間が、別の側面においては同時に切り離されている自らを見出す。この分離は、自らの関与を破壊はしないが、その土台を掘り崩し、自らを分裂したままに放置する。客観的な自己は、自分から切り離された対象と同一の人だと気づき、この特定の生に囚われていると感じるようになる。つまり、他人事のようにだがそこから離れられず、主観的な深刻さに引きずられているように感じながらも、それを捨て去ろうとは試みることをできない。(210/322)

では、分裂などということはどうしてするのか、しなければよいではないか、という疑問が浮かぶだろう。しかし、それは問屋が下ろさない。客観化への運動は、人間として生きること——人間学的に——セットされている。人間の視点から見れば、むしろ、どうして他の動物にあってはそれが起こらないのか、不思議なぐらいだ。

例えば、人を好きになった場合、相手の心を捕らえようとして、ただ押しつけて押しまくるだけでなく、相手から見たら自分はどうか見えるかと考え始めないか。さらにそこから、古来

人間は恋愛においてどんな態度・戦略を採って成功してきたか、と問うて恋愛小説や指南書を読まないだろうか。にもかかわらず、恋愛成就に至らない場合、これで人生が終わるわけではなく自分と言いきかせ、危機を乗り越えようとしたりもするだろう。客観化の度合が高まれば高まるほど、当該の恋愛は、その切実性を減じてゆく。それは——とりわけ失恋した場合など——精神衛生には良いが、物事がどうでもよくなってゆくプロセスではある。客観的ニヒリズムだ。

7 客観的に見れば、人生に意味などない

ネーゲルお得意の話題、人生の意味について考えてみよう。

十分にはるか外側から見れば、私の誕生は偶然で、私の人生は無意味で、私の死はとるに足りないように思える。だが内側からみれば、私が生まれなかったとはほとんど想像することすらできない。私の人生はとてつもなく重要で、私の死は破局的に思える。(209/341)

私が存在しなかったからといって、そのことで世界はより悪くはならなかっただろうし、私がいないので寂しいなどとは

誰一人感じなかっただろう。もしかすると、モーツァルトや
アインシュタインのように、存在しないことが真の損失とな
るような人も少しはいるのかもしれないが、ほとんどの場合、
特定の誰かが存在しなければならぬ理由など全くない。さ
らに進んで、人類とその生の形が存在すべきだった理由すら
ないと言ってよいかもしれない。それらが存在しなかったと
しても、あらためてそれらを創造する必要などなかったら
う。(213/348)

私が生きることとは、当人である「私にとって」は、切実に重
要である。すべてはそこから始まり、そこにかかっている。主
観的視点に立つ限り、ニヒリズムは成り立ちえない。自分の人
生に意味がないと嘆く人は、ニヒリストではない。人生にある
はずの意味が自分の人生にはない、と絶望しているにすぎない。
そうではなく、ニヒリストとは、人生にはそもそも意味などな
い、と考える人をいう。

ネーゲルは、ニヒリズムを、もっぱら客観的視点の側に配す
る。彼の価値論は、主観的相対主義と客観的ニヒリズムという
両極の間を動いている。そのどちらの極端も採用できないこと
は明かだ。誰が相対主義に甘んじえようか。誰がニヒリズムに
居直りえようか。ネーゲルの立場は、その両極端の間のどこか

に落とし所を見出そうとする、中途半端と評しもしたくなる試
みなのだ。ネーゲルの文章は、派手さのない落ち着いたものだ
が、しかし、その内容は、読み手を落ち着かせてくれない。

客観的に見れば人生は無意味たることを免れえない、と言
うのだが、ただし、この点を指摘することにネーゲルの「人生の
意味」をめぐる考察の眼目があるわけではない。無意味である
にもかかわらず、その無意味な人生を相手に、人間は、主観的
には大真面目になって取り組み、右往左往し一喜一憂するし
かない、それが人生だ、というのが彼の診断である。そのよ
うな滑稽なあり方に彼が与えるのが「馬鹿げている・不条理
(absurd)」という形容である。野球の二軍戦や老人ゴルフに
譬えられる。

人間ドラマを観察することは、リトルリーグの野球の試合を
観察するのに少し似ている。参加者たちの興奮は充分理解で
きるのだが、実際にその身になることはできない。同時にし
かし、参加者の一人でもあるので、相対的な見方をするこ
となど認められないような仕方での試合に直接巻きこまれて
もいる。(217-8/336)

8 客観的な価値は、ある

さて、本稿の本題、価値の問題、倫理の問題に入る。

ウルトラ客観主義 (overobjectification) (152/256) は価値論的にはニヒリズムである。そこから、主観的パースペクティヴと客観的パースペクティヴの適度な配合という課題が帰結する。ネーゲル哲学の努力とは、主要には、この課題に向けられるものである。その上で、ネーゲルは——意外にも——「客観的価値というものが存在する」と宣言する。すると、良いものを存続させ、増やす行為が良い行為であり、それに対して、良いものを減らし、悪いものを増やす行為は悪い行為である、ということになる。例えば、痛みは悪いものであり、快感は良いものだ。

私は倫理的快樂主義者ではない。しかし、快と苦はとても重要だと考える。そして、それらは、ある種の客観的価値について選好や欲求よりもより明かな例を呈示していると考えられる。それが誰のものであるかには関わりなく、感覚的な快は良く、苦は悪いという意外性に乏しい主張を、私は擁護しようと思ふ。(156/256)

9 アンチ実在論を論駁する

「客観的価値は実在する」と主張する際、その主張の論証において、ネーゲルは、一風変わった戦略を採る。挙証責任を負うのは、客観的価値の実在論者の側ではなく、アンチ実在論者の側だ、と言うのである。その結果、実在論者であるネーゲルとしては、実在の論証をする必要はなく、アンチ実在論者の持ち出す論証が成り立たないことを証示するだけで十分だ、ということになる。

アンチ実在論として、代表的な三つの論拠が挙げられ、その上で斥けられる。槍玉に挙がるものの一つは、われわれには既におなじみの宇宙論的ニヒリズムである。アンチ実在論の主張を要約しつつ、これを斥けてネーゲルは言う。

なるほど、どこでもないところからの世界の捉え方だけでやりくりするしかないのであれば、何かが価値をもつかどうかを言うことはできないだろう。だが、客観的な眺めは、それだけでやりくりしているわけではない。そのデータには、自分自身もふくめ特定のパースペクティヴをもつ個人にとっての価値という現象も含まれるのだから。(146-7/240)

第二の論拠は、文化相対主義とでも呼ぶべきものだ。現実には多様な価値観が存在する、という経験的事実を楯にとるこの主張は最もポピュラーなものでもあるのだが、それをばっさり切り捨てるネーゲルの議論は、切れ味鋭く爽快である。

この議論の人気の高さは、私には驚くべきことに感じられる。道徳性が社会的に教えこまれたものであり、それについての根本的な不都合が、文化をまたぎ時代を超え、それどころかある時点でのそれぞれの文化の中にも存在するという事実、価値が客観的な実在性をもたないと結論する理由としては貧弱なものだ。真理が存在する場合であっても、それを見出すことは必ずしも容易ではない。(478/242)

最も手強く感じられるのは、しかし、価値の存在身分そのものをめぐる考察を論拠とするアンチ実在論である。このアンチ実在論は、価値を、実在論上の特別な身分を持つ何ものか、「存在論的にこの上なく奇妙な性質を持つ実在的对象」と規定し、その上で、そんな奇妙なものはどこにも実在しないと論じているに過ぎない、とネーゲルは指摘し、これを斥ける。

この考えは正しくない。たとえば、痛みの客観的な悪さとは、

どの痛みもがもつ何か不思議なさらなる特性などではない。世界を客観的に眺めることができる者なら誰でも痛みが止んでほしいと思うべき理由があるという事実に過ぎない。価値が実在するという考えは、価値とは、実在する神秘的実体や特性であるという考えではなく、それは実在する価値であるという考えなのだ。つまり、価値や、なすべき理由がある何かについてのわれわれの主張は、われわれの信念や性向とは独立に真か偽である、という考えだ。(44/236)

10 行為の価値とはその理由であるが、それだけではない

「良い／悪い」という形容は、行為に帰せられる。しかし、それだけではない。例えば、苦痛は悪い、という風にも用いられる。「頭痛にアスピリン」というのは、ネーゲルが繰り返し持ち出す例だ。

私は、頭痛を取り去りたいと思う。だが、これは私がアスピリンを飲む直接の原因とはならない。アスピリンを飲むのは、頭痛を取り去りたい欲求がそれを飲むための理由を与え、飲みたいという思いを正当化してくれると私が認めるからだ。

頭痛は、それに苦しんでいる当人にとってだけ悪いものなのではないだろう。切実さは減るとしても、外から観る人も、また、その痛みの軽減、解消を望むだろう。相手の身になって考えるということ、もし自分がそうだったらと考えることが、客観的に見るといふ姿勢の中には含まれる。

われわれが世界に対してとる態度は、純度100%の観る姿勢であることなど減多にあるまい。人を好きになる例であれ、囲碁・将棋の例であれ、そこでは、ある特定の結果が追求されている。つまり、そこには、こちら側の欲求や願望・関心があり、その成就がめざされている。だから、その場合の主観性とは、制限された視点という話にとどまるものでは決してない。そうではなく、欲求・願望・関心といったものが、主観性の内容の中心をなしているのだ。ここに働いているのは、ただ単に世界を正確に観るだけではおさまらず、世界から何らかの結果を引き出そうとする心の動きなのだから、その限りで、実践的な性質のものである。そして実際、古来、倫理学においては、この実践的主観性の取り扱いをめぐって様々な議論が展開されてきたのだ。われわれの欲求・願望・関心は、多くの場合、偏っている。自己中心的に偏っている。自分に都合の良いように

しか動かない。だから、それは「修正」を要する。その点では、理論的主観性との間に違いはないのであって、ここでも、客観化への運動ははなからセットされている。

そして、ここでも認識論的主観性におけるのと同型の問いが立つ。実践に関わる主観性も、これまた、削減されればされるほど望ましい何ものかなのか、客観性が獲得されればされるほどめでたいという事情にあるのか、という問いである。人間の欲望を、われわれの心から平静を奪うものと見なし、これが消失すればするほど良い、と考えるような立場は実際に存在するのであり、この立場を採用するならば、究極の客観性は努力目標ともなりうるだろう。

しかし、欲求や願望・関心といったものは、それこそが、そもそもわれわれを生きたることや行為することへと動かす前提条件、経験の可能性の条件ではないのか。それがあからこそ、われわれは生きているのではないか。それをすっかり消し去ってしまふような姿勢、無心・無私・無我の境地からは、そもそも何らの問いも発生してはこないだろう。ネーゲルが「客観的ニヒリズム」という言い方をする時考えているのは、この事情である。

だから、実践的な問いにおいては主観性を消去することは獲得目標とはなりえない。問題は——『どこでもないところから

の眺め』の冒頭に宣言されたように——それを客観性との関係においてどう位置づけるかなのだ。

私はいかに生きたいのかという問いは、客観性への要請によって消去されることはない。だからといって、しかし、その問いは、ただ「したい」をめぐる問いにとどまってはくれない。

「すべき」の次元を獲得せずにはすまないのだ。私はいかに生きるべきかをめぐる問いであり、それは、単に願望の問題にとどまることはできず、理由をめぐる問いとなり始める。そして、そう考え始める時、「私は」ではなく、「人は」いかに生きるべきかという視点からも考えることが不可避になる。客観化の度合が高まらばにはすまないのだ。(それに対して、「人はいかに生きたいのか」という風には問いは立つまい。)

問題は、主観的願望(動機)と客観的理由の関係にある、という風に描き出すこともできる。さて、客観的理由——そんなものがあるのか。

事実記述と規範的判断の関係というところから考えてみよう。「地球は丸い」は事実記述だ。それに対して、「煙草は体に悪い」はどうか。一見すると、これは規範的判断だ。「悪い」の語が入っており、「煙草を吸うべきではない」という言明の言い換えであると読める。しかし、煙草を喫う人と喫わない人の肺がん発症率を比較した数学的統計を考慮すれば、この判断は、

事実を記述していると見なすことも可能だろう。「煙草を喫うと、肺がん発症率が高まる」と言っているに他ならない、と。

いや、そうではないのかもしれない。「煙草は体に悪い」という判断は、事実記述の命題が、同時に規範的主張でもありうることの、模範的実例になっていると見るべきなのではないか。「喫煙は肺がん発症率を高める。ゆえに、煙草を喫うべきではない」ということを——事実記述と規範的要請を——一挙に表現する命題になっているのではないか。

しかし、おそらく、そうではない。というのも、肺がん発症率が高まるからといって、そこから、「だから」煙草を喫うべきではない」という要請は、単に論理的には導き出されはしないだろうから。瞬間的快楽の獲得と長生きとを天秤にかけたら、後者の方が価値が高い、という価値判断がそこにさらにつけ加わって初めて、だから、煙草など喫うべきではない、との主張は掲げられもするのだろうか。

ここで、煙草を喫い続ける人の姿勢をネーゲルの観点から描き出そうとすると、二つの可能性が考えられる。主観性の立場が一つ、もう一つが客観性のそれだ。前者は、煙草の害など無視、あるいは抑圧するというものだ。煙草の害などというものはマジでは受け止めない、さしあたり忘れることで、煙草を喫いたいという主観的欲求に身を委ね続けるのである。

それに対して、後者、客観性の姿勢は、居直り路線だ。「煙草は体に悪い」と言われても、「それで？」と聞き直る。人間、所詮いつかは死ぬのであって、五十九年生きるのと、七十九年生きるのとでどれだけの違いがあるのか、と応じる。悠久の時間の流れにあっては、二十年の違いなんて無に等しいのだから。客観的視点ゆえのニヒリズムである。

多くの喫煙者は、主観的欲求に身を委ねつつ、客観的視点に立つニヒリズムも程よくまじえて自らを正当化するという折衷案を採用しているのではないか。痛を発病すると大半の人が煙草を止める。ニヒリストではないので、遅ればせながら、延命に心を砕き始めるのだ。しかし、世の中には確信犯的喫煙者もいるようで、医者が何と言おうとも断固として喫煙を続けるのだが、彼らは動物派なのであり、ニヒリストなのではない。

もっとも、ネーゲルの観点から考えれば、ニヒリストは必ず喫煙を続ける、とも言えない。というのも、客観的ニヒリストにとっては、すべてはどうでもよいことになるのであって——どうでもよいとは、些細であり、重要でないという意味だが——すると、自分の健康や延命ということも重要性を失うだろうが、煙草の魅力だとして、取るに足りないものになるのではなか。しかし、実際には、動機づけの力という点で、長生きという観念は、禁断症状として現われる身体的欲求ほどには強力

なものたりえないのだろう。主観性とは、つまりは、内側から突き上げてくるような力（欲動）ということであり、それに比して、外側から自分を眺めて発せられる理性（理由）の声は、どうしても弱々しいものとならずにはすまないのだろう。

しかし、それなら、身体的欲求こそが、動機づけの力として強く、観念的なものは、所詮、それに太刀打ちすることなどできない、と言うことは正しいか。おそらく、そうではない。わが子と別れなければならぬ、という思いは、煙草を止める強い動機づけになってくれないか。観念的に狂うことができる、という点こそは、人間を他の動物から区別する、人間性の核心にある何ごとかなのではないか。動物的欲求を抑え込んで長生きしようとすることもできれば命を投げ出すこともできる、それが人間ではないか。

普遍的な道徳は、外から押しつけられるのではなく、自分自身を外から眺めようとするわれわれの性向と自分自身を外から受け容れようとするわれわれの必要性とを反映している。自分をこのように受け容れることができなければ、われわれは自分の生から重大な意味で疎外されていることになるだろう。(198/324)

ここで光をあてられているのは、行為の動機と理由の関係だ。ネーゲルが持ち出すニューヨークのレストランでの食事の話は、東京に生きる私にとっても決して他人事ではない。

ニューヨークのそこそこ高級なレストランでの二人分の勘定はバングラデシユの一人あたりの年収に相当する。そうしなければならぬからではなく、ただそうしたいという理由で外食するたびに、そこで使われる金額は、飢餓の救済に寄付された方が明らかに多くの善をなすことができるだろう。

〔……〕

公平さに重きをおく強烈に非個人的な道徳が、われわれの多くが望ましいと考えるような個人の生活を深刻に脅かしかねないことは、明らかだ。(190/311-2)

個人の置かれた特定の状況の外に立つ見方について語る次の文は、ネーゲルの客観性概念を理解する上で、大いにヒントになるように思われる。

この見方は、切り離されているだけでなく、普遍的でなければならず、しかも意志を引きつけるものでなければならぬ。

(201/328)

ここには、客観性について考える際に考慮に入れられるべき三つの論点が列挙されている。何よりもまず、隔たりをおくことであるが、それだけでは十分ではない。その上で、第二に普遍性ということ、第三に動機づけということが、考慮に入れられる必要がある。一つに、ウルトラ客観主義とは、「どうでもよい」という態度を帰結することにしかならないとする批判があり、それが動機づけへの注目を引き出しているのだと考えられる。

ただし、ネーゲルは、動機づけだけを重視してすまはししい。それが、普遍性という論点である。これは、しかし——隔たりをおくこととは違って——「どうでもよい」という姿勢に直結するものではない。ウルトラ客観主義を回避、あるいは修正するための手がかりが、動機づけという点に求められるというのは、興味深い論点で、隔たりをおいて見ることは、行為への動機づけという点では、希薄化を結果せずにはすまないというのだが、要するに、行為への動機づけは、もっぱら主体の側からしか出てこない、ということなのではないか。ネーゲルは、行為の理由は、必ずしも客観的なそれには限られないと言う。つまり、主体の側の理由というものも認めるわけだが、動機については、客観的なそれというのは考えにくいのではないか。

ここからわかることは、主観性と客観性は、左右対称の関係にはない、ということだ。客観性とは、外から観る姿勢だが、外から欲する、とは言えないのではないか。それに対して、主観性は、内から観ることであるとともに、内から欲することでもある。だから、観ることについては、かなりの点まで、客観的であればあるほどそれだけ一層良い、と言えるのだが（ただし、ここでは、主観的経験は捨象される、という難点が残るのではあるが）、欲することの度合は、客観的であればあるほどより少なくなる、と言わざるをえなくなる。認識と行為とで、主観性／客観性は、対等には配されていない。日本語では、*subjektiv* は主観性／主体性、と訳し分けたくなるのに、*objektivität*の方は、客体性では何のことやらわからなくなる、というのも、この点に関わってのことであるに違いない。

11 暫定的結び

広い意味での倫理学は価値一般を問題にする。良さ／悪さという性質は、それが何に属するものであれすべて関心の対象となる。品物の良さ、作品の良さ、人柄の良さ、人生の良さ、社会の良さ、等々。けれども、狭い意味での倫理学は、行為の良さに焦点を絞る。良い行為とはどんな行為か——それが問題だ。

例えば、快苦の良し悪しが問題になるのも、ある行為が快苦を引き起こしたり、増やしたりするからだ。快苦の良し悪しを問うとは、つまりは、快苦をもたらず（増減させる）行為の良し悪しを問題にすることに他ならない。

さて、行為は必ず他者に関係するか。カントが、他者に対する義務と並べて自己に対する義務も考えたことにも見て取れるように、他者に関わらない行為も存在する。例えば飲酒、あるいは禁酒という行為。飲みたいという欲求は主観性の核をなすものだが、では、健康のために飲みたいのを我慢する思いはどうか。そこには他者は介在しないから、それは依然として主観的な思いか。そうではない。ネーゲルの客観性の規定のポイントは、「今ここにいる私」から隔たりを置くことにあった。健康に配慮することは将来を考えることであり、既に「今ここ」から離れる視点に歩を進めている。だから、他者に関わらない行為についても、その客観的価値を語ることができるのであり、間主観性と客観性の違いは、この点に発する。

それに対して、倫理の問いは、他者が存在する行為に関わる。自分の健康や自分の魂の永生への問いは、倫理の問いではない。「平等」論文の中で、ネーゲルは言う。

（人が）誰にどんな仕打ちをすることになるのかへの関心こ

それは、(そんなことをすると)何が起ころのかへの関心とは対立するものとして、倫理学の主要な源泉であるのだが、その点是不十分にしか理解されていない。(MQ115/181)

倫理の問いにあっては、他の誰とも置き替えることのできない特定の他者が存在し、その他者にとって自らの行為が何を意味するのか、こそが問われる。だから、倫理的行為においては、視点の客観性とは、単に自分に対して距離を置くことだけを意味するのではない。その行為が関わる特定の他者の立場に身を置くこと、相手の身になって考えることが、重要な課題になってくる。ネーゲルに言わせると、「誰かが何かをすべき唯一の理由は、それをする方が、世界全体のことを考えればより良いだろう、ということである」(1623/2667)と考えるタイプの倫理理論——名指しされているのは、ヘアだが——は、この点を見ていないことになる。

ある行為は世界にどれだけのプラス(あるいは、マイナス)の価値をもたらすか、という問いかけは、具体的な人を見ていない。しかし、倫理的な行為は、特定の人々の間でなされるものである。より具体的に言い換えれば、行為は、複数の人間の利害の対立という状況の中でなされるのであり、その行為の良し悪しとは、その行為が、対立のいかなる調停を帰結するのか、

という観点において評価されるものだ、とネーゲルは考える。

利害の衝突のあるところには、誰にとっても完全に受け入れ可能な結果など存在しえない。しかし、結果が最も受け容れ難いものとなる人にとって受け容れ難さの最も少ない結果を見出そうとして、各人の観点からそれぞれの結果を評価することは可能である。(MQ123/192)

ここには、ネーゲル流に改訂された格差原理が呈示されている。最も恵まれない人について——まるで、恵み(幸福)を測る客観的尺度が存在するかのよう——語るのではない。そうではなく、「受け容れ難さ」の少なさこそが格差を容認する理由とされる。そして、受け容れ難さという尺度においては、各人の主観性が斟酌されているのだ。

ネーゲルによれば、主観性と客観性は連続的・漸進的な関係にあり、二項対立的に考えられてはならないのだった。加えてより客観的であればあるほど良い、という関係にはない——ウルトラ客観主義が真理を約束するわけではない——のだった。すると、めざされるべきは、主観性／客観性を測る物差しのみならずか適切な落とし所を見出すことになる。その一方で、しかし、ネーゲルは、主観性と客観性の対立関係や「分裂」

(170/278) についても語っている。

人生を営む上では、至るところで、内部の視点と外部の視点との対立関係が真剣に受け止められねばならないのだ。

(163/268)

まるで、そこに二項対立がある、とでもいうかのようにあって、これは首尾一貫しない話である、との印象が否みがたい。

しかし、われわれの生の現実、実際この通りなのではないか。われわれは、主観的パースペクティヴと客観的パースペクティヴの折り合いのつかなさの内に苦慮しつつ生きている。そしてめざされるのは、概して、より客観的な解決策である。往々にして、ウルトラ客観主義こそが正しい解決をもたらしてくれるかのように思い込まれるが、それは誤解である。主観性は、決して最終解決の中に包摂され、霧消するわけではない。その意味で、対立の総合という言葉遣いには——落とし所の発見という言葉遣いに吸収・解消し尽くされない——真理成分が

ある。

ここで、複数の主観的パースペクティヴの間の調停をめざすネーゲルの思考は、間主観的合意形成の理論なのではないか、との疑問が浮かぶ。とりわけ、ウルトラ客観主義を斥けるのだから、ゴールは、間主観的合意という「客観性もどき」なのではないか、と考えられかねない。

しかし、他にもない、間主観的パースペクティヴというような発想そのものが、実は、神の視点の密輸入の上に成り立つものではないか。仮に、合意が目標とされうるとしても、それは、個別の主観から出発し、客観性を志向する、そして、そういう客観化の無数の運動が衝突・葛藤を繰り返り広げる、その現場において起こるといふ風にこそ描き出されるべきものなのではないか。間主観的視点などというのは、それこそ「どこでもないところからの眺め」だ。合意は複数の主観の間で得られるのだとしても、その合意の価値（＝理由）は、客観的である——ネーゲルはそう考えているのではないか。

引用はThomas Nagel, *The View from Nowhere*, New York, 1986からのものである。引用の直後に、原典と邦訳（春秋社、二〇〇

九年）の頁数を示した。ただし、11章には、Thomas Nagel, *Mortal Questions*, Cambridge, 1979所収の「平等」論からの二つの引用が

含まれており、M〇という略号が原典と邦訳（勁草書房、一九八九年）の頁数の前に置かれている。なお、訳文はすべて拙訳による。